

2019年12月10日

宮城県知事 村 井 嘉 浩 殿

一般社団法人 日本建築学会  
東北支部長 石 川 善



宮城県美術館（建物・外構等）の保存活用に関する意見書

拝啓、時下ますます御清祥のこととお慶び申し上げます。

平素より、本会の活動につきましてご理解とご協力を賜り、厚く御礼を申し上げます。

さて、貴県におけるホームページの公開情報によりますと、施設再編等の在り方検討懇話会の方針の一端として、宮城県美術館の移転が俎上に上がっています。全国的にも重要課題となっている公共施設のマネジメントに関し、まずはその御労苦に敬意を表します。

宮城県美術館は、昭和56年の開館から40年近くが経ち、老朽化が進行していることから、昨年3月にリニューアル基本方針\*が示されました。現存資産を一定程度残すことが明示され、性急な解体がないことにまずは安堵したところでしたが、「宮城県民の芸術文化の足跡」「日本を代表する建築家・故前川國男の設計による」「骨太で豊穡な空間と卓越した意匠」「広瀬川の河岸段丘にたつ環境造形と文教地域への波及」といった複合的価値を有していることは御承知おきのことと存じます。ちなみに、前川國男建築を有する県・史は近年、保全ネットワークを形成するなどますます評価が高まっており、貴県もまた、保存活用の手腕が期待されております。

戦災をはじめ、宮城県沖地震、東日本大震災といった数々の苦難に見舞われた宮城県仙台市では、歴史的建造物の保存措置が十分なされていない面があり、とりわけモダニズム建築の秀作は他に例がありません。その端正なたたずまいは、同時期の当地方における他の建造物群を格段に超えるクオリティを有し、希少です。庭園が広瀬川周辺とつながる一体感をもったその姿は、貴県民の皆様にも馴染みの原風景になっているといえましょう。

施設の老朽化、芸術文化そのものの時代変容など、課題が少なくないことは事実ですが、東日本大震災や台風害によって原風景の喪失感に苛まれている方々と心をともにする貴県において、親しまれた大切な場所の保存活用を丁寧に検討することは必須と存じます。

貴下におかれましては、この建築文化遺産の心的・美的・史的価値について、改めて御理解いただき、保存活用の方途（ソフト／ハード双方の存続をはじめとする保存活用の多様な解法）を検討いただくことが肝要と考え、公開情報をもとにした本会の現時点での見解を添付して、意見申し上げる次第です。今後、耐震診断等の結果公表や、存続／移転にともなう都市計画的見地からの検討がすすみ、貴県の方針が明確になりましたら、改めて論点を明確化した要望書を提出させて頂くことも検討しています。

なお、本会はこの保存活用に関して、学術的観点からの御相談をお受けいたします。

敬具

（参考）\*宮城県美術館リニューアル基本方針，宮城県教育委員会，平成30年3月

一般社団法人日本建築学会  
東北支部 歴史・意匠部会  
部会長 速水清孝

## 宮城県美術館（建物・外構等）についての見解

### 1) 建物の概要

宮城県美術館は、仙台市青葉区川内元支倉 34-1 に存する。34,532 m<sup>2</sup>の敷地は、東進する広瀬川右岸の河岸段丘にあるため、南上段が中町段丘、北下段が下町段丘となっている。このうち東部の 22,042 m<sup>2</sup>には 1981（昭和 56）年 11 月に竣工した本館が、西部には 1990 年（平成 2 年）6 月に竣工した佐藤忠良記念館が建つ。南を正面とし、アプローチや駐車場を配する一方、北には段丘を活かした北庭が、また新旧 2 棟のあいだには中庭（アリスの庭）があり、回遊させる意図が見てとれる。宮城県唯一の公立美術館で、1979（昭和 54）年の基本構想では「県民が美と知識と憩いを得る場」として、開かれた総合美術センター的性格を備えることが期待された。

本館の設計は前川國男建築設計事務所（担当＝窪田経男氏、大宇根弘司氏、角田憲一氏ら）、建築施工は間組・三井建設・橋本店共同企業体である。延床面積 3,676 坪（12,130 m<sup>2</sup>）・建築面積 1,792 坪（5,915 m<sup>2</sup>）、地上 2 階地下 1 階（および塔屋 1 階）の鉄筋コンクリート造（一部鉄骨鉄筋コンクリート造）で、外壁は後期前川事務所が多用した特性磁器質タイル打込みとなっている。構造体としては下町段丘に建つ地階が 1 層目にあたり、正面からのヴォリューム感が低く抑えられ、水平性が強調されている。空間構成としては、北奥に特別展示室を 2 階、常設展示室を 1 階、収蔵庫を地階とした中核部が配置され、壮大なエントランスホールが来場者を出迎える。一方、そこへ誘う 1 階のアプローチは長く、南東部ピロティ回廊の一部にもなっていて、美術教育のための創作室・講堂が配置されている。地階の県民ギャラリーとともに入口近くにこれらが配され、開かれた総合美術センターなる基本構想を忠実かつ豊穡に具現化している。

他方、佐藤忠良記念館は、本館の竣工翌年に前川事務所から独立した大宇根建築設計事務所（大宇根弘司＝前掲）が手がけている。延床面積 906 坪（2,990 m<sup>2</sup>）・建築面積 566 坪（1,869 m<sup>2</sup>）、地上 1 階地下 1 階の鉄筋コンクリート造である。外観こそ本館と統一された打込みタイルを採用しているが、内部は本館と対比させた白亜の大理石が採用され、大きなガラス面からみえる本館のタイル外壁が存在感を示す。しかも、外面に反射するミラーガラスのため、内部を保護すると同時に、彫刻のある中庭を幻想的に魅せる効果を与え、その名の所以ともなっている。

なお当施設は、周辺に東北大学川内キャンパスをはじめ、県立・私立高校、仙台市博物館、仙台城跡等、文教地区が広がっており、都市計画的にも要地に在るといえる。

### 2) 歴史的価値

#### ①設計者としての評価

日本近代建築の旗手といわれる前川國男の存在意義は比類ない。世界三大巨匠の一人、ル・コ

ルビュジェのパリのアトリエに学び、帰国後はレーモンド事務所に入所、独立後は丹下健三ら多くの著名建築家を育てた。戦後は日本相互銀行、東京文化会館、工業化住宅プレモス開発ほか竣工だけで200以上の作品を手がけ、6度もの日本建築学会賞と同大賞、オーギュスト・ペレー賞、日本芸術院賞などを受賞した。既往研究\*\*によれば、前川の足跡は、Ⅰモダニズム格闘期（戦前）、Ⅱテクニカルアプローチ期（戦後）、Ⅲ中世主義的創作探求期（昭和後期）といった時代区分で捉えられるとされる。宮城県美術館は、第Ⅲ期の最後期に位置するが、前川を支え、本館の設計を実質的に手がけた大宇根弘司氏が佐藤忠良記念館を手がけているから、技術継承の第Ⅳ期ともとれる位置づけとなる。あまりに多くの著名作品がある前川作品のなかでは、宮城県美術館が代表作として語られることは必ずしも多くないが、いわば「円熟期・世代継承期の前川モダニズム建築」として、二世代にわたる設計者の歩みを刻む歴史的価値を認めることができる。

## ②建築意匠上の評価

前川國男の建築は、日本のモダニズム建築の中核に位置するともいえる堂々としたプランを有しているが、同時に細部の工夫にも余念がない。宮城県美術館も、主要な柱間寸法を4m×16mと規定して、頑強かつ伸びやかに空間が展開する一方、プレキャストコンクリート等の構法、内外装、建具・金物に至るまで、各部の意匠も秀逸であり、外装タイルはその代表例である。

上述のとおり、前川建築における第Ⅱ期と第Ⅲ期の画期は1960年代とされ、経済成長下における近代建築の限界を感じながら、ものづくりの本質に立ち返ったともいわれる。その結果、経年劣化のリスクが懸念される当時の鉄筋コンクリート打放しではなく、寸法体系と素材感を考え尽くした特性タイルを開発し、これを先加工したあとにコンクリート打設を行う「タイル打込み」を開発探求していく。大宇根弘司氏はその重要な右腕で、「宮城県美術館では山梨県立美術館とほぼ同じメンバーで挑み、果たしきれなかった課題を克服した（文献\*\*\*より要約）」とある。すなわち、外壁を特性磁器質タイル打込み（一部はプレキャストコンクリート打放し）とした当建物は、同時期の前川建築の完成形の一つともいえる。天井に多用されているインド砂岩砕石打込みGRC（軽量化と質感を両立したプレキャストコンクリート）や床の特性磁器ミラージュタイルなど、部材群に対する確かな検討が伸びやかなプランに連続展開されることで、力強い前川建築の空間・意匠が立ち現れている。こうした点から、建築意匠における当建築の歴史的価値が確認されるところである。

## ③景観上、地域文化的な評価

広瀬川の河岸段丘にフィットした宮城県美術館は、抑えられたヴォリューム感でも分かるように、一種のランドスケープ建築といっても過言ではない。背景の山並み、眼前の広瀬川との一体感は、庭園に散在する彫刻の名作群を引き立てており、宮城県出身の世界的彫刻家・佐藤忠良と、これをとりまく立体彫塑系の美術作品群をどう活かすかといった課題とよく整合している。

佐藤忠良記念館の増築にあたっては、本館開館10周年が近づいた頃、佐藤忠良氏に対する世界的評価の高まりがあり、当時急増していた収蔵品の有効活用の機運ともあいまって計画へと進んだと伝わり、このことは、外構計画をさらに進化させることとなったと推察される。

一般に公立美術館は、収蔵品・収蔵庫を持たない貸しギャラリーから始まったとされる。宮城県美術館では、当初から「県民が美と知識と憩いを得る」ために本格的な施設が整備され、同時に創作室のような教育施設を併設するに至った。そして、佐藤忠良を起点として彫刻家の作品群

が集まり、これが外構にも配置され、庭園に散歩に来た人々もが本格的な造形を鑑賞することができるようになった。その景観上の価値、地域文化的な価値が、改めて確認される。

#### ④都市計画的な評価

仙台市青葉区川内地区は、近世、仙台城二の丸と家臣団屋敷等が広がっていた要地にあたり、宮城県美術館の立地位置も家臣団屋敷が割られた場所であった。近代に入ると陸軍第二師団に接收され、軍都仙台の足跡を刻む。すなわち、国有地として温存されたのち宮城県に払い下げられたことが、宮城県美術館の敷地を創出する背景となったという事情がある。同様にして周辺の文教地区は形成され、とくに宮城県美術館、東北大学萩ホール（二の丸跡）、仙台市博物館（三の丸跡）といった公共文化施設は、当文教地区のなかでも一般県民や観光客が活用できる空間として親しまれている。すなわち、ここに立地していること自体が重層的な文化を表出し、仙台の都市格に寄与するという都市計画的価値を有しているといえる。

#### ⑤構造安全等の評価／まとめにかえて

前川建築の骨太な構造設計（構造設計者：横山建築構造設計事務所）は、一般的な鉄筋コンクリート造建築物の耐用年数とされる60年を降ることはないと期待されるものの、度重なる震災の遭遇、打込みタイルによる内部劣化の不可視性とタイル部の剥落懸念など、慎重な耐震診断・評価が求められる。本見解は、2019年12月時点での公表情報をもとに記していることから、今後は、構造安全等の現状評価に関する更なる詳細検討が必要と考えられる。

以上、本建築は、①前川國男ら設計者の技術技法に関する価値、②建築意匠上の価値、③景観上、地域文化的な価値、④都市計画的な価値を有しており、⑤構造安全等の評価を加えながら、「保存活用」が検討されるべきといえる。このとき、美術館機能（ソフト）と美術館建築環境（ハード）の双方、もしくはいずれかに限定した保存など、その存続のあり方には幾つかのケースが想定できる。当見解は、ソフト・ハードともに保存されることを最良とし、移転かつ解体されることは最悪と考える立場である。

ただし、人口減少下において喫緊の課題となっている公共施設のマネジメントは重要であり、当施設も含めてその維持経営を検討する必要性に異論はない。そのためにも、現有資産の価値を全県的に再確認し、十分な議論を重ねることを意見して、まとめにかえたい。

表 宮城県美術館の存続論議 2019 に関する日本建築学会東北支部としての考え方

宮城県美術館の存続方法		美術館機能（ソフト）	
		保存	移転
美術館 建築環境 (ハード)	保存	◎ A:現状活用+修繕	△ B:経営や機能の移転+修繕
	部分保存	△ C:リニューアル活用+リノベ	△× D: 経営や機能の移転+リノベ
	解体	× E:美術館機能を残して建替え	×× F:機能移転+解体売却等



写真 1 宮城県美術館 正面入口



写真 2 宮城県美術館の北庭と段丘地形



写真 3 宮城県美術館エントランスホール



写真 4 佐藤忠良館およびアリスの庭

上記 4 点撮影＝大沼正寛（歴史・意匠部会委員），2019 年 12 月

（参考）

\*\* 松隈洋ほか編集「建築家 前川國男の仕事」美術出版社，2006

\*\*\* 建築文化 1982 年 1 月号「宮城県美術館」pp137-146